『教育』復刊五〇〇号記念のつどい

佐々木　享

「日本教育の良心」（創刊号の特集題目）のあかしたらんことを期して三七年前の一九五一年十一月に創刊された雑誌『教育』は、本年十月号をもって五〇〇号となった。これを誇りとし、これを心から祝おうとする人びとが出版クラブ会館に集い、表記のパーティが催された。一九八八年十二月十日夜。

参集した人々の胸にあったものは、つたない私のことばよりも、このつどいに贈られた綿引まささんの歌につくされている。

ひとすじに歩みつづけて五百号
　戦後教育の灯火なりし

つどいではまず、坂元忠芳教科研副委員長が、Xデーまじか、最悪の税制改革法案が通りそうな緊張した師走のこのつどいに参加されたことに謝辞をのべた。

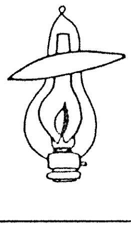
主催者挨拶に立った山住委員長は、雑誌『教育』は一九三一年六月に『岩波講座教育』の附録として刊行され始めた戦前の『教育』誌の系譜をひく故に「復刊」であることから説きおこし、講和直後、朝鮮戦争という歴史の転換点に創刊されたことに想いをめぐらし、出版事情困難な折に刊行をひき受け、編集内容には一貫してまったく容喙しなかった国土社には深く感謝しているとのべた。

委員長はまた、「『教育』の編集には、教育外の条件と教育活動とが交錯するところに見出されるいろいろな問題を科学的に究明するという方法を堅持したい。しかし、どこまでも現場の役に立つということをモットーにして行きたい」という初心（創刊号の編集後記）を大切にしたいとのべ、この点で『教育』の誌面には漢字が多く、むづかしい文章が多いといわれていることを反省し、創刊号が与えた「さわやかな感動」（芳賀直義）を持続させるべく努力する覚悟なので、今後もご支援ねがいたいと結んだ。

このあと、友宜団体を代表する丸木政臣、真船和夫、銀林浩の各氏から心暖まる祝辞をいただいた。『教育』のように、むづかしいと言われようとも筋を曲げないで、肩ひじ張って五〇〇号続けることは容易ではない（満場爆笑）、教育運動は思想運動であり理論構築こそがその課題である、むづかしいなどという批判にめげずに、質量ともに充実した研究者陣をじゅうぶんに生かして今後も頑張って欲しい、という丸木氏のことばには同氏の人柄がにじんでいるようにおもわれ、印象的だった。

歴代編集長の紹介、北田耕也元編集長の挨拶、お元気な姿を見せて下さった古川原・元編集長の音頭による乾杯で第一部は終えた。

第二部では歴代の編集実務担当者紹介のあと、鈴木正明国土社社長はじめ多くの方がたからお祝いと励ましのことばをいただいた。

さいごのハイライトは、一九七〇年から一八年余にわたって編集実務を担当している村田光江さんへ、山住委員長から、同家愛蔵のみごとな絵画が贈呈されたこと、創刊号以来の愛読者である綿引まささんから前掲の歌が山住委員長に贈られたことだった。

創刊号（復刊第一号）にも登場されていた冨田博之氏が五〇〇号後の現在も誌面をかざられ、このつどいにも見えて下さったのは嬉しいことだった。（ささき・すすむ）